

資料涉猟余話

その152

私はかねてより、「天龍探勝会印」の時又から鹿島や中の町に至る天龍川下りとはどんなものであったのか知りたかった。思っていた。

「天龍探勝会印」の朱印が押されている。果たしてこれは、誰が、何時、何のために撮った写真なのだろうか。

それに関する貴重な資料が、先頃、南信州地域資料センターに寄贈された。それは、厚手の台紙に貼付された大量の古い写真である。

その答えを『天龍峡紀行―歴史と名勝周遊―』（今村真直著、天龍峡景勝の保全復元を願う会編）と作品―（中日ホームニュースの週刊紙連載原稿）に探して見た。それこそ文題の「天龍探勝会印」である。

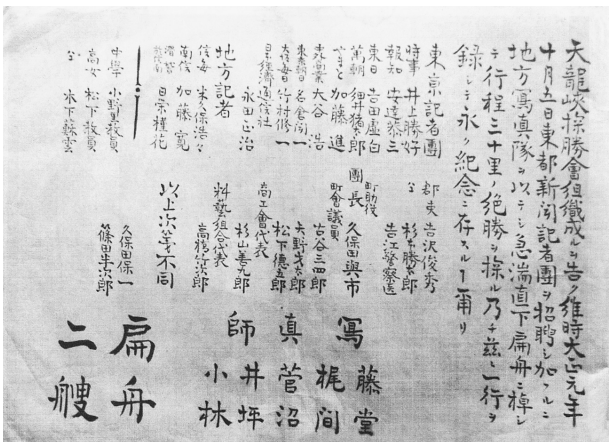
この企画は、当時の飯田町長小西吉太が、全ての台紙に

文中の「東都新聞記者団」は、時事新報の井上勝好記者を始め、報知・東京日・萬朝報・やまと・中外商業・東京朝日・日本経済通信・大阪毎日新聞等の記者である。また、地

鎌倉貞男

昔日の天龍川探勝記録

「天龍峡探勝会」の記録写真



天龍峡探勝会組織成ルヲ告グ



一行を「時又」を翻して探勝旗

時の新聞「南信」にも掲載されたことから、以下、その記事も併用しながら述べていきたい。記事は、時又と満島中部の鹿島の順に記されているので、本稿もそれに随うことにする。

また、最初に問題提起した多くの写真は、概ねこの時に撮影したものと思えるので、関係箇所でも紹介する。

とされる。企画の顛末は、当

天龍峡探勝

飯田町有志の發起に成る天龍峡探勝会一行は五日午前七時馬車二臺を先登りし、三時三十分を過ぎて乗船した。龍島村時又に向ふ。幸ひ天気快晴。全八時時又着。松川屋にて村民諸氏の款待を受く。探勝船は都合二隻。一隻は新聞記者一行、一隻は寫真隊員は河

当時の新聞「南信」の関係記事 (大正元年10月9日付)

別の一隻には写真隊等である。更に、下員が、それぞれ程よ伊那郡役所吏員、旧制飯田中学校や旧飯田高等女学校教員もこの「天龍峡探勝会」の構成員は官民様々である。写真に会の主たる目的は、「天龍峡三十里間」の奇勝を写真・絵画を始め、町会議員の文章等によつて広く天下に知らしめ、杉山善九郎、料芸組以て土地の繁栄に資せしめんとする」も新聞記者一行が、

のであった。動機は、その半月ほど前の九月二十一日、大英帝国皇帝名代として明治天皇の御大葬に参列した英國の著名皇族コンノート殿下が、天龍川を下航されたことによる。そのため、この企画は大いに世の注目や期待を集めた